

行為としての小説

テラトジーを超えて

◎ 榊 敦子著

物語のもつ行為をあきらかにすることはどういうことか。実行される「相互に関連する多数の条件に応じる」ということは何をさすのか。聞き手や読者への関係の性質＝状況的変数。語り手をくくるいっさいの経験と感性の慣行と伝統をも含めた心理的変数。このふたつの変数を、テキストのなかからいかに掘り出し、その規範でなければならなかつた理由を読み解く。これがバーバラ・ハーンショタイン・スミスに倣つた著者の方法らしい。こうして「草枕」「雁」や「丑」「黒い雨」、金井美恵子を読み解く作業が始まる。

語り手が語られる相手から観察され噂されることに気づく構造をもつ「草枕」。語り手も観察者も複数いて、「異なる声とまなざしの存在を知る」「雁」。話声と記述の饗宴によつて、様々なる物語が再話される「丑」。重層的な語りの時間があくことなく追求する記述にみちた「黒い雨」。複雑にいりくむ物語内部の行為に読解。(B6判・二